

はじめに

- 1 J・S・ミルは「改善の精神は、必ずしもつねに、自由の精神であるわけではない」(J・S・ミル『自由論』関口正司訳、岩波文庫、2020年、Kindle Edition, p.113)と語る。国家や社会は、改善の名のもとに個人に干渉したり、科学的根拠のない要請を押し付けてくることがある。社会進化論にもとづく優生学やマルクス主義が、進歩的な科学的議論として信奉されていた時代があるように、根拠のない「アップデート」には注意する必要がある。

1章 不適切な振る舞いとは何か？

- 1 <https://www.nytimes.com/2018/06/19/magazine/inappropriate-behavior-could-mean-a-faux-pas-or-a-crime.html>
- 2 同上
- 3 Pippa Norris, Cancel culture: Heterodox self-censorship or the curious case of the dog-which-didn't-bark, Faculty Research Working Paper Series, Harvard Kennedy School, July 2023
- 4 カロリース・フレスト『「傷つけました」戦争: 超過敏世代のデスロード』堀茂樹訳、中央公論新社、2023年、Kindle Edition, p. 6
- 5 Yascha Mounk, The Identity Trap: A Story of Ideas and Power in Our Time, Penguin Press, 2023
- 6 Mark Lilla, The Once and Future Liberal: After Identity Politics, C Hurst & Co Publishers Ltd., 2018
- 7 ジョナサン・ハイト、グレッグ・ルキアノフ『傷つきやすいアメリカの大学生たち: 大学と若者をダメにする「善意」と「誤った信念」の正体』西川由紀子訳、草思社、2022年、Kindle Edition, p.23
- 8 ジョナサン・ハイト、グレッグ・ルキアノフ、Kindle Edition, P.55
- 9 五十嵐彰、迫田やか『不倫—実証分析が示す全貌』中公新書、2023年、Kindle Edition, p. 69
- 10 <https://www.pewresearch.org/short-reads/2014/04/15/whats-morally-acceptable-it-depends-on-where-in-the-world-you-live/>
- 11 Report of the Committee on Freedom of Expression: <https://provost.uchicago.edu/sites/default/files/documents/reports/FOECommitteeReport.pdf>
- 12 J・S・ミル『自由論』関口正司訳、岩波文庫、2020年、Kindle Edition, p.19
- 13 ただしミルは、無条件に悪行権の尊重を求めるわけではない。成熟した判断能力や十分な情報や知識がない場合の選択には、介入の余地があり、この点からミルをソフトなバスターナリズムとする解釈もある。またミルは、奴隷になる自由(自由を放棄する自由)は認めていないという有名な一節も存在する。
- 14 ただし不倫をカント主義や徳倫理などの観点から批判する論者もいる。また不倫が、配偶者の重要な選択(性的健康、経済決定、家族計画)に影響を及ぼし、その観点から配偶者の自律的決定

を損なうという意味で、権利侵害にあたると考える議論もある。たとえばRichard A. Wasserstrom “Is Adultery Immoral?” (Philosophical Forum 1974)などを参照。

- 15 法哲学者のR・A・ダフが刑法の文脈で示す「公的不正」という概念からアプローチすることもできるが、議論が複雑となるため本書では扱わない。ダフについては、R A Duff, Answering for Crime: Responsibility and Liability in the Criminal Law (Legal Theory Today), Hart Pub. Ltd., 2007。日本語で読める文献としては、高島麻未「R.A. ダフの公的不正について」『法学研究論集58号』(2023年)など。
- 16 Joel Feinberg, Offense to Others (Moral Limits of the Criminal Law), Oxford University Press, 1988
- 17 <https://digitalasahi.com/articles/ASS8J2HQXS8JULLI007M.html>
- 18 https://hr.berkeley.edu/sites/default/files/microaggressions_clarification_evidence_and_impact.pdf
- 19 https://homepages.se.edu/cvonbergen/files/2018/05/Microaggressions_Strong-Claims-Inadequate-Evidence.pdf
- 20 たとえば <https://www.theatlantic.com/politics/archive/2015/09/why-critics-of-the-microaggressions-framework-are-skeptical/405106/> など。

2章 何をすれば人権侵害なのか？

- 1 木山幸輔『人権の哲学: 基底価値の探究と現代世界』東京大学出版会、2022年、p.6
- 2 リン・ハント『人権を創造する』松浦義弘訳、岩波書店、2011年、pp.29-43
- 3 ロバート・ノージック『生のなかの螺旋——自己と人生のダイアローグ』井上章子訳、ちくま学芸文庫、2024年
- 4 Thomson Judith 9Jarvis (1971), “A Defense of Abortion,” Philosophy & Public Affairs, Vol.1, No.1, pp.47-66.
- 5 正確に言えば「自然状態」において、各人が好き勝手に振る舞い、それぞれの利害が衝突することと戦争状態に陥るのか、それとも、ある程度の秩序は保たれるのかは、論者によって異なる。
- 6 ジョン・ロックもまた、奴隷貿易への投資をおこなっていただけでなく、植民地経営などにも関与していた。
- 7 <https://www.ohchr.org/en/statements-and-speeches/2022/01/memory-dignity-and-justice>
- 8 Jeffrey Flynn, Human Rights in History and Contemporary Practice: Source Materials for Philosophy
- 9 Samuel Moyn, The Last Utopia: Human Rights in History, Belknap Press, 2012
- 10 James Griffin, On Human Rights, Oxford University Press, 2009, Kindle Edition, p.92
- 11 James Griffin, Kindle Edition, p.92
- 12 こうした問題設定をすることで、個人の「痛み」を軽視したり、差別主義者による「アレもコレも人権侵害と言われて息苦しい」との主張を助長していると非難する人もいだろう。当然そのことは自覚的であるが、それでも筆者は、人権の範囲を確定することで、その価値の劣化に抗

- う必要があるというグリフィンらの問題意識に同意する。
- 13 Jeffrey Flynn, Human Rights in History and Contemporary Practice: Source Materials for Philosophy
 - 14 神谷悠一『差別は思いやりでは解決しない ジェンダーやLGBTQから考える』集英社新書、2022年、Kindle Edition, pp. 3-4
 - 15 Deborah A. Small, George Loewenstein, Paul Slovic, Sympathy and callousness: The impact of deliberative thought on donations to identifiable and statistical victims, *Organizational Behavior and Human Decision Processes* Volume 102, Issue 2, March 2007, pp.143-153
 - 16 尊厳の概念分析をおこなった日本語で読める包括的な著作としては、マイケル・ローゼン『尊厳—その歴史と意味』（内尾太一、峯陽一訳、岩波新書、2021年）。
 - 17 ジェームズ・グリフィン（2008年、<https://www.amazon.co.jp/Human-Rights-James-Griffin/dp/0199238782>）のように、権利の根拠として尊厳を主張する立場には、多くの批判がある。
 - 18 ただし思いやりや配慮などを尊厳（尊敬）の問題と結びつける論者もあり、必ずしも「思いやりターゼ」がすべて問題わけではない。たとえばRobin S.Dillon 1992 <https://philarchive.org/rec/DILRAC>
 - 19 ただし尊厳の起源に関する議論をすべてカントに帰することには慎重になる必要がある。たとえばR. Debes, *Respect: A History*, 2017。
 - 20 日本語訳としては、たとえば大橋容一郎訳『道徳形而上学の基礎づけ』（岩波文庫、2024年）。
 - 21 実際には、ここまで単純化された功利主義はほとんど議論されない。日本語で読める功利主義の入門書としては、児玉聡『功利主義入門：はじめての倫理学』（ちくま新書、2012年）がある。
 - 22 Onora O'Neill, *Constructions of Reason*, Cambridge University Press, 1990
 - 23 ただ尊厳という概念を経由することに反対する論者もいる。たとえば生命倫理学者のルース・マックリンは「尊厳は役に立たない概念です。それは、個人またはその自律性を尊重すること以上の意味はありません」と断言する（2003年）。
 - 24 グリフィンに関する日本語で読める数少ない研究は、前述した木山幸輔『人権の哲学』（東京大学出版会、2022年）、特に第6章（pp.134-194）がある。
 - 25 木山幸輔『人権の哲学：基底的価値の探究と現代世界』東京大学出版会、2022年、p.32
 - 26 木山、p.33
 - 27 <https://news.un.org/en/story/2023/09/1140882>
 - 28 Jeremy Waldron, *The Harm in Hate Speech* (Oliver Wendell Holmes Lectures), Harvard University Press, p.125
 - 29 マイケル・イグナチエフ『人権の政治学』エイミー・ガットマン編、添谷育志、金田耕一訳、風行社、2006年、pp.101-103
 - 30 Charles R. Beitz, *The Idea of Human Rights*, Oxford University Press, 2009, Kindle Edition, p.209
 - 31 Charles R. Beitz, p.212
 - 32 ベイツは、人権の価値を自然権や尊厳から基礎付けようとする「自然主義理論」と、それらがど

のように国際社会で機能してきたかという「実践理論」に分けて、後者を擁護する。

- 33 ジョン・ロールズほか『人権について オックスフォード・アムネスティ・レクチャーズ』中島吉弘、松田まゆみ訳、みすず書房、1998年、pp.51-101
 - 34 木山、p.42
- 3章 差別のない、平等な社会はどう実現するか？
- 1 https://www.moj.go.jp/JINKEN/jinken04_00108.html
 - 2 <https://www.un.org/womenwatch/uncoordinated/anti-harassment.html#:~:text=Discrimination%20is%20any%20unfair%20treatment,%2C%20ethnic%20origin%2C%20sexual%20orientation%2C>
 - 3 「不当な差別」という言葉があるように、差別を区別のようなニュアンスで使うこともあるが、本書では基本的に、差別という用語を「道徳的・倫理的に問題がある区別」という文脈で用いていく。ただし読みやすさのため、文脈に応じて意図して「差別」を用いることもある。
 - 4 T. M. Scanlon, *Moral Dimensions: Permissibility, Meaning, Blame*, 2008
 - 5 この区分・呼び方に異論もあるだろうが、わかりやすさのために本書ではそのように記述する。
 - 6 「女性に差別を受けやすい」ことは一般論であり、国や領域などによって事情は異なる。その際、世界経済フォーラムのジェンダー・ギャップ指数（GGGI）のように意義と限界の両面が指摘される指数だけでなく、ジェンダー不平等指数（GII）などを確認する必要があるものの、大枠でそれを「事実」と言い切ることは問題ないだろう。
 - 7 池田喬、堀田義太郎『差別の哲学入門 シリーズ・思考の道先案内』アルパカ、2021年、Kindle Edition, p.48
 - 8 「黒人」表記への批判もあるが、近年はカリブ海にルーツを持つ人々などへの尊重から「アフリカ系アメリカ人」表記にも疑義が呈され、「black」ではなく大文字を用いた「Black」が提唱されるなど、定着した呼称はない。本書では分かりやすさを重視して、黒人を用いる。
 - 9 上杉忍『アメリカ黒人の歴史 増補版：奴隷貿易からオバマ大統領、BLM運動まで』中公新書、2024年、Kindle Edition, p. 32
 - 10 <https://www.census.gov/data/tables/2025/demo/income-poverty/p60-286.html>
 - 11 <https://www.census.gov/library/publications/2025/demo/p60-287.html>
 - 12 <https://bjs.ojp.gov/library/publications/jails-report-series-2024-preliminary-data-release/web-report>
 - 13 Kristian Lum, William Isaac, “To predict and serve?” *Significance*, Volume13, Issue5, October 2016, pp.14-19
 - 14 <https://www.aclu.org/the-war-on-marijuana-in-black-and-white>
 - 15 <https://www.rand.org/research/gun-policy/analysis/essays/methodological-challenges-research-racial-bias-police-shootings.html>
 - 16 アイリス・マリオン・ヤング『正義への責任』岩波現代文庫、2022年、岡野八代、池田直子訳、Kindle Edition, p. 317

- 17 ただし、この分類は必ずしもすべての専門家が合意しているわけではない。詳しくは、Lippert-Rasmussen, K. (2018) The philosophy of discrimination: an introduction. In The Routledge Handbook of the Ethics of Discrimination, Routledge.
- 18 Benjamin Eidelson, Discrimination and Disrespect, 2015 (Oxford Philosophical Monographs) また【思考実験3-8】は、アイデルソンによる就学前教育の例 (Kindle Edition, p.55) を参照している。
- 19 アイリス・マリオン・ヤング『正義と差異の政治』飯田文雄、菊田真司、田村哲樹、河村真実、山田祥子訳、2020年、Kindle Edition, p.273
- 20 Judith Jarvis Thomson, Preferential Hiring, Philosophy & Public Affairs, Vol. 2, No. 4 (Summer, 1973), pp. 364-384
- 21 <https://www.law.cornell.edu/supct/html/02-241.ZX1.html>
- 22 ただしトーマスの主張は、憲法制定時の意図に固執する原典主義（オリジナリズム）であるとして批判も集めている。たとえば <https://www.nytimes.com/2018/08/02/opinion/contributors/clarence-thomas-supreme-court-conservative.html>。
- 23 南川文里『アフターマティヴ・アクション 平等への切り札か、逆差別か』中公新書、2025年、Kindle Edition, p.157
- 24 南川、pp.182-185
- 25 田中将人『平等とは何か：運、格差、能力主義を問いなおす』中公新書、2025年、Kindle Edition, p. 48
- 26 田中、pp.57-58
- 27 エリザベス・アンダーソン「平等の要件とは何か」『平等主義基本論文集』広瀬巖訳、勁草書房、2018年、Kindle Edition, p.68
- 28 アンダーソン、p.69
- 29 アンダーソン、pp.114-115
- 30 南川、pp. 103-104
- 31 Deborah Hellman, When Is Discrimination Wrong?, Harvard University Press, 2011, Kindle Edition, p.35

4章 コンプライアンスは誰がどう決めているのか？

- 1 <https://harpersbazaar.com.au/celebrities-who-free-the-nipple/>
- 2 <https://time.com/collection/question-everything/4029632/lina-esco-should-we-freethenipple/>
- 3 たとえば Hannah McCann, 'The Free-Flying Natural Woman Boobs of Yore?' the Body Beyond Representation in Feminist Accounts of Objectification. <https://journals.sagepub.com/doi/abs/10.1177/0141778920944550>
- 4 『月刊国民生活』2001年12月号、pp.49-53
- 5 伊藤昌亮『炎上社会を考える 自衛警察からキャンセルカルチャーまで』中公新書ラクレ、2022年、Kindle Edition, p. 20

- 6 <https://www.nikkei.com/article/DGXZQOCD255OV0V20C25A2000000/>
- 7 郷原信郎、元榮太郎『初級 ビジネスコンプライアンス：第3版—「社会的要請への適応」から事例理解まで』東洋経済新報社、2022年、Kindle Edition, p. 11
- 8 先駆的な議論としては、1930年代のバール・ドッド論争がある。
- 9 Howard R. Bowen, Social Responsibilities of the Businessman, University of Iowa Press, 2013, Kindle Edition, p.7
- 10 Archie B. Carroll, The pyramid of corporate social responsibility: Toward the moral management of organizational stakeholders, 1991
- 11 <https://www.nytimes.com/1997/04/04/opinion/1-nike-s-workplace-abuses-violate-civil-rights-450006.html>
- 12 <https://www.industrialunion.org/rana-plaza-brands-must-pay-compensation-by-9am-on-24-april>
- 13 https://time.com/6959174/culture-war-corporate-america-esg/?utm_source=chatgpt.com
- 14 <https://www.un.org/unispal/document/a-hrc-59-23-from-economy-of-occupation-to-economy-of-genocide-report-special-rapporteur-francesca-albanese-palestine-2025/>
- 15 https://www.washingtonpost.com/business/interactive/2025/dei-companies-sec-filings/?utm_source=chatgpt.com
- 16 Chiara Macchi, The Normative Foundation of the Corporate Responsibility to Respect: A Critical Analysis, Business, Human Rights and the Environment: The Evolving Agenda (pp.45-61)
- 17 John Gerard Ruggie, The Social Construction of the UN Guiding Principles on Business & Human Rights Faculty Research Working Paper Series
- 18 Amartya Sen, Elements of a Theory of Human Rights
- 19 <https://erbumich.edu/2023/09/07/how-can-business-prioritize-justice-two-student-researchers-weigh-in/>
- 20 Kevin Gibson, Ethics and Business: An Introduction (Cambridge Applied Ethics), Cambridge University Press, Kindle Edition, p. 171
- 21 ケビン・ギブソン（2023年）は、報復的正義や回復的・修復的司法の概念によって説明している。
- 22 <https://www.nytimes.com/1970/09/13/archives/a-friedman-doctrine-the-social-responsibility-of-business-is-to.html>
- 23 Freeman & Reed 1983 Stockholders and Stakeholders: A New Perspective on Corporate Governance
- 24 最近の研究としては、Orts, E.W., & N.C. Smith, 2017, The Moral Responsibility of Firms, Oxford Univ Press.
- 25 Amartya Sen FBA, The Idea of Justice, Penguin Books Ltd, Kindle Edition, pp.135-136

5章 ポリティカル・コレクトネスは「行き過ぎ」なのか？

- 1 <https://x.com/katepanda2/status/1183729350207623169>

2 <https://mainichi.jp/articles/20240109/k00/00m/040/109000c>

3 <https://www.sankei.com/article/20230521-6COMX4B2TVPYFNDYJCENHZAK4/>

4 倉持麟太郎『リベラルの敵はリベラルにあり』ちくま新書、2020年、Kindle Edition, p. 76

5 麻布競馬場『令和元年の人生ゲーム』文藝春秋、2021年、Kindle Edition, p.161

6 清水晶子、ハン・トンヒョン、飯野由里子『ポリティカル・コレクトネスからどこへ』有斐閣、2022年、Kindle Edition, p. 3

7 清水、p.156

8 清水、p.156

9 <https://archive.nytimes.com/www.nytimes.com/live/republican-debate-election-2016-cleveland/trump-on-political-correctness/>

10 https://www.facebook.com/photo.php?fbid=10158281524825725&id=153080620724&set=a.488852220724&locale=ja_JP

11 詳しくは、石田健『カウンターエリート』（文春新書、2025年）。

12 https://withnews.jp/article/f0180406003qq00000000000000W03j10101qq000017134A?ref=list_sp

13 ただし1964年には、リンドン・ジョンソン大統領が全米自動車労働組合大会で「私は皆さんに、政治的に正しいから（politically correct）ではなく、正しいから（right）こそ、必要なことを行うつもりだと伝えるためにここにいます。私たちは、夏の間ずっとかかって、公民権法案を可決するつもりです」と演説している。ジョンソンのいう「正しい」は道徳的な意味合いであり、「政治的正しさ」は否定的な意味で用いられている。

14 Paul Berman, *Debating P.C.: The Controversy over Political Correctness on College Campuses*, Random House Publishing Group, 1995, Kindle Edition, p.5

15 *Safire's Political Dictionary (Revised)*, Oxford University Press, 2008

16 Some "Politically Incorrect" Pathways Through PC, 1994

17 <https://www.nytimes.com/1990/10/28/weekinreview/ideas-trends-the-rising-hegemony-of-the-politically-correct.html>

18 <https://www.youtube.com/watch?v=01kX1WGdJWc>

19 ジョナサン・ハイト、グレッグ・ルキアノフ『傷つきやすいアメリカの大学生たち：大学と若者をダメにする「善意」と「誤った信念」の正体』西川由紀子訳、草思社、Kindle Edition, p. 372

20 Norman Fairclough, *Critical Discourse Analysis: The Critical Study of Language*（第2版）、Routledge, 2010

21 <https://websekai.wanami.co.jp/posts/2828>

22 <https://www.mdpi.com/2076-0760/7/12/245>

23 <https://gendai.media/articles/-/86381?page=3>

24 清水晶子、ハン・トンヒョン、飯野由里子『ポリティカル・コレクトネスからどこへ』有斐閣、2022年、Kindle Edition, p.156

25 Yascha Mounk, *The Identity Trap: A Story of Ideas and Power in Our Time*, Allen Lane, 2023,

Kindle Edition, p. 14

26 ダグラス・マレー『大衆の狂気 ジェンダー・人種・アイデンティティ』山田美明訳、徳間書店、2022年、Kindle Edition, p. 27

27 <https://www.youtube.com/watch?v=S6-UC8yr0Aw>

28 https://rrapp.spia.princeton.edu/how-effective-is-unconscious-bias-training-a-comprehensive-evaluation-of-recent-assessments/?utm_source=chatgpt.com

29 https://www.scientificamerican.com/article/the-problem-with-implicit-bias-training/?utm_source=chatgpt.com

30 J・S・ミル『自由論』関口正司訳、岩波文庫、2020年、Kindle Edition, pp.29-30

31 ハイト、p.359

32 Ronald Dworkin, "Foreword," in Ivan Hare and James Weinstein (eds.), *Extreme Speech and Democracy*, Oxford University Press, 2009

33 ジェレミー・ウォルドロン『ヘイト・スピーチという危害』谷澤正嗣、川岸令和訳、みすず書房、2015年、Kindle Edition, p. 232

34 金慧『デモクラシーと表現の自由—表現の規制は民主的正統性を握り崩すのか』『年報政治学』2024年11月、pp.354-375

35 このアイデアは、Jacob T. Levy "Rationalism, Pluralism, and Freedom, Oxford University Press, 2014" から来ている。Levy は、リベラリズムを「合理主義 (rationalism)」と「多元主義 (pluralism)」の緊張関係によって特徴づける。

36 <https://bleedingheartlibertarians.com/2016/03/safe-spaces-academic-freedom-and-the-university-as-a-complex-association/>

37 https://watermark02.silverchair.com/book_9780262343664.pdf

6章 女性を褒めることは不適切なのか？

1 <https://www.nytimes.com/2017/10/05/us/harvey-weinstein-harassment-allegations.html>

2 たとえば『ハッシュタグだけじゃ始まらない 東アジアのフェミニズム・ムーブメント』など。

3 https://tansajp.org/investigativejournal_category/kakusan/

4 清水晶子『フェミニズムってなんですか？』文春新書、2022年、p.11

5 田中東子「感じのいいフェミニズム？：ポピュラーなものをめぐる、わたしたちの両義性」『現代思想』2020年3月臨時増刊号「総特集＝フェミニズムの現在」、青土社、pp.26-35

6 パトリシア・ヒル・コリンズ、スルマ・ビルゲ『インターセクショナルリティ』小原理乃、下地ローレンス吉孝訳、人文書院、2021年、Kindle Edition, p. 18

7 <https://archive.nytimes.com/opinionator.blogs.nytimes.com/2015/10/15/a-feminism-where-leaning-in-means-leaning-on-others/>

8 Sheryl Sandberg, *Lean In Women, Work, and the Will to Lead*, 2013, Alfred A. Knopf

9 https://www.theguardian.com/commentisfree/2013/oct/14/feminism-capitalist-handmaiden-neoliberal?CMP=tw_t_gu

- 10 Yvette Maker, Care and Support Rights After Neoliberalism Balancing Competing Claims Through Policy and Law, Cambridge University Press, 2022
- 11 Yvette Maker, Care and Support Rights After Neoliberalism : Balancing Competing Claims Through Policy and Law, Cambridge University Press, 2022
- 12 S. Bearman, & M. Amrhein, (2014). Girls, women, and internalized sexism. In E. J. R. David (Ed.) Internalized oppression: The psychology of marginalized groups (pp. 191-225). Springer, Cudd, E., & Jones, E. (2005). Sexism. In R. G. Frey and C. H. Wellman (Eds.) A companion to applied ethics (pp. 102-117). Oxford: Wiley Blackwell Publishing.
- 13 Glick, P., & Fiske, S. T. (1996). The Ambivalent Sexism Inventory: Differentiating hostile and benevolent sexism. Journal of Personality and Social Psychology, 70 (3), 491-512.
- 14 <https://link.springer.com/article/10.1007/s11162-025-09849-3>
- 15 Jennifer L. Lawless, It Still Takes a Candidate: Why Women Don't Run for Office (Revised and Expanded Edition), Cambridge University Press, 2010
- 16 ただし政治学者の前田健太郎は、日本の選挙で女性候補者が少ない原因として、有権者のジェンダー・バイアスや立候補する意欲の男女差とは別に、「政治家にとって効率的な政党組織は、主に男性政治家にとって効率的なものになっている可能性」があるとして、政党の構造的問題を指摘する。
- 17 <https://www.theheadline.jp/articles/1160>
- 18 https://www.gender.go.jp/research/kenkyu/dansei_ishiki/pdf/chapter_3_3.pdf
- 19 https://www.spf.org/global-data/user48/Research_Report.pdf
- 20 <https://withnews.jp/article/f0201213000qg0000000000000000G00110101qg000022230A>
- 21 Best Practices or Best Guesses? Assessing the Efficacy of Corporate Affirmative Action and Diversity Policies:https://web.cfa.harvard.edu/cfawis/Dobbin_best_practices.pdf

7章 外見を褒めることは不適切なのか？

- 1 <https://www.wsj.com/tech/personal-tech/facebook-knows-instagram-is-toxic-for-teen-girls-company-documents-show-11631620739>
- 2 <https://www.isaps.org/discover/about-isaps/global-statistics/>
- 3 https://www.yano.co.jp/press-release/show/press_id/3844
- 4 <https://toyokeizai.net/articles/-/583502>
- 5 西倉実季、「『ルッキズム』概念の検討：外見にもとづく差別」『和歌山大学教育学部紀要・人文科学』2021年2月8日、pp.147-154
- 6 Andrew Mason, What's Wrong with Lookism?: Personal Appearance, Discrimination, and Disadvantage (New Topics in Applied Philosophy), Oxford Univ Pr, 2023, Kindle Edition, p.69
- 7 トマス・ネーゲル『新装版 コウモリであるとはどのようなことか』永井均訳、勁草書房、2025年、Kindle Edition, p.166
- 8 田中真人『平等とは何か 運、格差、能力主義を問いなす』中公新書、2025年、Kindle

Edition, p. 84

- 9 西倉実季「外見が『能力』となる社会」『現代思想』2019年9月号「特集＝倫理学の論点23」青土社、Kindle Edition, p.314
- 10 ルッキズムと認識の不正義については、Thomas J. Spiegel, Lookism as Epistemic Injustice Social Epistemology A Journal of Knowledge, Culture and Policy. Volume 37, 2023 - Issue 1
- 11 Peter Takáč, Current issues in aesthetics and beyond: Revisiting lookism, Ethics & Bioethics, Volume 10: Issue 1-2, 2020
- 12 Andrew Mason, What's Wrong with Lookism?, Oxford Univ Pr, Kindle Edition, p.58
- 13 Louis Tietje, Steven Cresap, Is Lookism Unjust?: The Ethics of Aesthetics and Public Policy, The Journal of libertarian studies 19 (2), 2010
- 14 西倉実季、堀田義太郎「外見に基づく差別とは何か」『現代思想』2021年11月号「特集＝ルッキズムを考える」青土社、Kindle Edition, pp.22-23

8章 「日本人ファースト」は不適切なのか？

- 1 https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00047.html
- 2 望月優大『ふたつの日本「移民国家」の建前と現実』講談社現代新書、2019年、Kindle Edition, p.5
- 3 <https://medium.com/@notoxenophobia/election2025>
- 4 <https://kokkai.ndl.go.jp/txt/119804601X00720190307/239>
- 5 <https://www.washingtonpost.com/news/morning-mix/wp/2016/01/15/that-vexing-natural-born-citizen-requirement-what-were-the-founding-fathers-afraid-of/>
- 6 <https://www.cbsnews.com/news/cbs-news-poll-should-us-presidents-be-natural-born/>
- 7 一橋大学社会学部貴堂ゼミ生&院ゼミ生有志『大学生がレイシズムに向き合って考えてみた【改訂版】——差別の「いま」を読み解くための入門書』明石書店、2023年、Kindle Edition, pp. 37-38
- 8 小英熊二『単一民族神話の起源—「日本人」の自画像の系譜』新曜社、1995年
- 9 https://www.bpo.gr.jp/?p=10866&meta_key=2021
- 10 https://houmukyoku.moj.go.jp/saitama/page000001_00440.pdf
- 11 <https://survey.gov-online.go.jp/hutai/r04/r04-ainu/2.html#midashi2>
- 12 <https://reconciliation.waseda.jp/wakaidict/1399/>
- 13 一般社団法人共同通信社『記者ハンドブック 第14版 新聞用字用語集』共同通信社、2022年、Kindle Edition, p. 740
- 14 百瀬響「北海道旧土人保護法の成立と変遷の概要」『史苑』55 (1)、立教大学史学会、1994年、pp.64-86
- 15 上野昌之「近代アイヌ差別の発生についての考察」『早稲田大学大学院教育研究科紀要』別冊 19 (2)、早稲田大学大学院教育学研究科、2011年、pp.37-48
- 16 佐々木千夏「現代におけるアイヌ差別」『調査と社会理論』研究報告書35 先住民族多住地域の

- 社会学的総合研究—札幌市・むかわ町・新ひだか町・伊達市・白糠町を対象にして—、北海道大学大学院教育学研究科教育社会学研究室、2016年、pp.45-70 佐々木 千夏「アイヌ・非アイヌの人々が語る差別の諸相」『北海道アイヌ民族生活実態調査報告その6』アイヌ民族多住地域調査報告書、2018年、pp.125-135
- 17 『最新アイヌ学がわかる』佐々木史郎、北原モコットウナシ、エイアンドエフ、2024年、p.37
- 18 2008年、衆参両院で「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が採択されたことで、町村官房長官（当時）の談話によって、アイヌを先住民族と認める認識は示されていた。
- 19 『最新アイヌ学がわかる』佐々木史郎、北原モコットウナシ、エイアンドエフ、2024年、p.146
- 20 <https://www.courts.go.jp/assets/hanrei/hanrei-pdf/93129.pdf>
- 21 塩出浩之「琉球処分「沖縄問題」の原点」中公新書、2025年、Kindle Edition、p. 262
- 22 「本土」という表現には、植民地主義にもとづく差別的な意味合いが含まれる。しかし本書では、読みやすさを優先してこの表現を用いる。
- 23 安里長従、志賀信夫『なぜ基地と貧困は沖縄に集中するのか?』堀之内出版、2022年
- 24 https://www.pref.kinawa.jp/_res/projects/default_project/_page_001/007/967/kodomonohin_kontaisakukeikaku0403.pdf
- 25 安里長従、志賀信夫『なぜ基地と貧困は沖縄に集中するのか?』堀之内出版、2022年、Kindle Edition、p.12
- 26 安里、志賀、p.139
- 27 安里、志賀、p.140
- 28 新崎盛暉『沖縄現代史 新版』岩波新書、2025年、Kindle Edition。
- 29 在日コリアン以外にも、在日朝鮮人や在日韓国・朝鮮人などのさまざまな呼び方があり、朝鮮半島の南北分断などの歴史的背景を踏まえた議論なども盛んになっている。本書では、特別な文脈がない限り、在日コリアンという呼び方に統一する。
- 30 <https://www.nhk.or.jp/minplus/0018/topic058.html>
- 31 <https://mainichi.jp/articles/20230901/ddl/k30/040/315000c>
- 32 ミン・ジン・リー『バチンコ』上、文春文庫、2023年、Kindle Edition、p.261
- 33 文京洙『在日朝鮮人問題の起源』クレイン、2007年、p.3
- 34 水野 直樹、文京洙『在日朝鮮人 歴史と現在』岩波新書、2015年、Kindle Edition、p.126
- 35 李振成「砧をうつ女」文春文庫、1977年、Kindle Edition、p.153
- 36 平野千果子『人種主義の歴史』岩波新書、2022年、Kindle Edition、p.7
- 37 エリック・ウィリアムズ『資本主義と奴隷制』中山毅訳、ちくま学芸文庫、2020年
- 38 オレリア・ミシェル『黒人と白人の世界史——「人種」はいかにつくられてきたか』児玉しおり訳、明石書店、2021年
- 39 <https://digital.asahi.com/articles/AST5F1JLCT5FUPQJ00PM.html>
- 40 T. H. Marshall, Tom Bottomore, Citizenship and Social Class, Pluto Press, 2014
- 41 Will Kymlicka, Multicultural Citizenship: A Liberal Theory of Minority Rights (Oxford Political Theory), Oxford University Press, Kindle Edition, pp.17-18

- 42 ウィリアム・キムリッカ『新版 現代政治理論』千葉眞、岡崎晴輝訳、日本経済評論社、2005年、p.476
- 43 たとえば Charles Taylor, The Politics of Recognition
- 44 <https://www.theguardian.com/politics/2004/feb/24/race.eu>
- 45 キムリッカ、p.478
- 46 Yael Tamir, Liberal Nationalism (Studies in Moral, Political, and Legal Philosophy), Princeton Univ Pr, 1993, Kindle Edition, p. 6
- 47 日本人のナショナリズムについては、田辺俊介編『日本人は右傾化したか』（勁草書房、2019年）を参照。

9章 「なんでもかんでもハラスメント」は不適切なのか?

- 1 白河桃子『ハラスメントの境界線:セクハラ・パワハラに戸惑う男たち』中公新書ラクレ、2019年、Kindle Edition、p. 3
- 2 白河、Kindle Edition, pp. 6-7
- 3 単なる政治家の数の問題ではなく、そのことがもたらす問題点については、前田健太郎『女性のいない民主主義』（岩波新書、2019年）を参照。
- 4 白河桃子『ハラスメントの境界線:セクハラ・パワハラに戸惑う男たち』中公新書ラクレ、2019年、Kindle Edition、p.98
- 5 白河、Kindle Edition, p. 106
- 6 <https://business.nikkei.com/atcl/gen/19/00304/031500078/>
- 7 仕事の世界における暴力及びハラスメントの撤廃に関する条約（第190号）、邦訳は厚生労働省 <https://www.mhlw.go.jp/content/10501000/001293633.pdf>。
- 8 渋谷秀樹、赤坂正浩「憲法1 人権（第8版）」有斐閣アルマ、2022年、Kindle Edition、p. 283
- 9 Mary Kate McGowan, Just Words: On Speech and Hidden Harm, Oxford Univ Pr on Demand, Kindle Edition, p. 1
- 10 三木那由他『言葉の展望台』講談社、2022年、Kindle Edition, pp. 61-62
- 11 池田喬「ただの言葉がなぜ傷つけるのか」『哲学』（69）、日本哲学会、2018年、p.18
- 12 日本語で読めるこうした議論については、江口聡「ボルノグラフィに対する言語行為論アプローチ」（http://repo.kyoto-wu.ac.jp/dspace/bitstream/11173/227/1/0140_001_002.pdf）や八重樫徹「抑圧的発話による規範の構成——M・K・マクゴワン」の理論を中心に——」（『宮崎公立大学人文学紀要』2023年3月 pp.121-136）を参照。
- 13 ミランダ・フリッカー『認識的不正義』佐藤邦政、飯塚理恵訳、Kindle Edition, pp. 13-14

10章 「誰かを優先する」のは不適切なのか?

- 1 倉持麟太郎『リベラルの敵はリベラルにあり』ちくま新書、2020年、Kindle Edition, pp.246-247
- 2 <https://digital.asahi.com/articles/ASP985CTXP93UPQJ017.html?pn=12&unlock=1#continuehere>
- 3 J・S・ミル『自由論』関口正司訳、岩波文庫、2020年、Kindle Edition, p.20

- 4 日本語で読める功利主義の入門書は、児玉聡『功利主義入門——はじめての倫理学』ちくま新書、2012年。特に「第4章 洗練された功利主義」を参照。
 - 5 齋藤純一、田中将人『ジョン・ロールズ 社会正義の探究者』中公新書、2021年、Kindle Edition, p.78 Kindle Edition.
 - 6 「二原理」と呼ばれるものの、3つの原理が含まれていることに疑問を持つかもしれないが、実際に(2-a)と(2-b)の区別を強調する論者もある。たとえばサミュエル・フリーマン(The Oxford Handbook of Distributive Justice, Oxford Univ Pr, 2018)。
 - 7 齋藤、田中、p.77
 - 8 異なる善の構想を有しているのに、なぜ人々はロールズの「正義の二原理」を受け入れるのだろうか。ロールズは、この問題に『政治的リベラリズム』(神島裕子、福岡聡、筑摩書房、2022年)で応えている。
 - 9 朱喜哲『〈公正(フェアネス)〉を乗り越えなす』太郎次郎社エディタス、2023年、Kindle Edition, p. 46
 - 10 齋藤純一、田中将人『ジョン・ロールズ 社会正義の探究者』中公新書、2021年、Kindle Edition, p. 82
 - 11 Robert S. Taylor, Rawlsian Affirmative Action*
 - 12 ジョン・ロールズ『正義論 改訂版』川本隆史、福岡聡、神島裕子訳、紀伊国屋書店、2010年、Kindle Edition, p. 721
 - 13 ジョン・ロールズ『正義論 改訂版』川本隆史、福岡聡、神島裕子訳、紀伊国屋書店、2010年、Kindle Edition, p.316
 - 14 World Poverty and Human Rights: Cosmopolitan Responsibilities and Reforms, (Polity Press, 2002, 2nd ed., 2008).
 - 15 <https://www.nikkei.com/article/DGXZQODK1445Y0U5A410C2000000/>
 - 16 マーク・リラ『リベラル再生宣言』夏目大訳、早川書房、2018年
- 11章 「キャンセルカルチャー」「社会的制裁」は正しいのか？
- 1 <https://www.bbc.com/news/world-us-canada-55959135>
 - 2 <https://apnews.com/article/eric-trump-cancel-culture-78f8e2fa29715e142a281bd6480c0782>
 - 3 山口 真一『正義を振りかざす「極端な人」の正体』光文社新書、2020年、Kindle Edition, p. 135
 - 4 <https://digital.asahi.com/articles/DA3S16148039.html?unlock=1#continuehere>
 - 5 J. Braithwaite, Shame Crime and Reintegration, Cambridge University Press, 1989
 - 6 ユルゲン・ハーバーマース『公共性の構造転換〔第2版〕』細谷貞雄、山田正行訳、1973年
 - 7 Nancy Fraser, Rethinking the Public Sphere: A Contribution to the Critique of Actually Existing Democracy, No. 25/26, pp. 56-80, 1990
 - 8 Meredith D. Clark, DRAG THEM: A brief etymology of so-called “cancel culture”, Communication and the Public 5 (3-4), 2020
 - 9 [https://www.washingtonpost.com/lifestyle/cancel-culture-background-black-culture-white-](https://www.washingtonpost.com/lifestyle/cancel-culture-background-black-culture-white-grievance/2021/04/01/2e42e4fe-8b24-11eb-aff6-4f720ca2d479_story.html)

- [grievance/2021/04/01/2e42e4fe-8b24-11eb-aff6-4f720ca2d479_story.html](https://www.washingtonpost.com/lifestyle/cancel-culture-background-black-culture-white-grievance/2021/04/01/2e42e4fe-8b24-11eb-aff6-4f720ca2d479_story.html)
- 10 https://www.washingtonpost.com/lifestyle/cancel-culture-background-black-culture-white-grievance/2021/04/01/2e42e4fe-8b24-11eb-aff6-4f720ca2d479_story.html
- 11 <https://www.vox.com/22384308/cancel-culture-free-speech-accountability-debate>
- 12 <https://www.vox.com/22384308/cancel-culture-free-speech-accountability-debate>
- 13 瀧川裕英、宇佐美誠、大屋雄裕『法哲学』有斐閣、2014年
- 14 <https://link.springer.com/article/10.1007/s10677-026-10542-2#Sec6>
- 15 https://philpapers.org/rec/JANTMI-4?utm_source=chatgpt.com

12章 不適切な振る舞いをしたら、どう謝罪し、どう償うか？

- 1 日本語訳は、法務省人権擁護局「今企業に求められる『ビジネスと人権』への対応『ビジネスと人権に関する調査研究』報告書」(2024年)を参照しつつ、筆者が一部変更。
- 2 〈国連総会決議 60/147〉
- 3 古田徹也『謝罪論 謝るとは何をすることなのだろうか』柏書房、2023年、Kindle Edition, p.121
- 4 Rodney C. Roberts, Race, Rectification, and Apology, The Oxford Handbook of Philosophy and Race (Oxford Handbooks), 2017, Kindle Edition, p. 519
- 5 Nick Smith, I Was Wrong: The Meanings of Apologies, Cambridge University Press, Kindle Edition, pp.35-36, p.38
- 6 Nick Smith, Kindle Edition, pp. 35-36
- 7 <https://digital.asahi.com/articles/ASR242GYMR23UTFK01Y.html>
- 8 <https://digital.asahi.com/articles/ASS580HFYS580HGB005M.html>
- 9 ヤスパースは、必ずしも全ての集団的な罪を否定しているわけではない。正確には、The Question of German Guilt (Fordham Univ Pr, 2001)、日本語訳は『われわれの戦争責任について』(橋本文夫訳、ちくま学芸文庫、2015年)など。
- 10 Rodney C Roberts, Kindle Edition, p.519
- 11 Howard Zehr, The Little Book of Restorative Justice: Revised and Updated (Justice and Peacebuilding), Good Books, Kindle Edition, p. 14
- 12 Howard Zehr, Kindle Edition, pp.14-15

13章 「不適切な振る舞い」をどう回避していくか？

- 1 ロビン・ディアンジェロ『ホワイト・フラジリティ 私たちはなぜレイシズムに向き合えないのか?』貴堂嘉之、上田勢子訳、明石書店、Kindle Edition, p. 203
- 2 真鍋昌平『九条の大罪 (2) [第12審] 家族の距離④』小学館、2021年

おわりに

- 1 石田健『カウンターエリート』文春新書、2025年、Kindle Edition, p. 8
- 2 Michael Lind, The New Class War: Saving Democracy From The Managerial Elite, Penguin

Random House, 2020

- 3 アントニオ・ネグリ、マイケル・ハート『アセンブリ 新たな民主主義の編成』水嶋一憲、佐藤嘉幸、箱田徹訳、岩波書店、2022年、Kindle Edition, p. 119
- 4 アントニオ・ネグリ、マイケル・ハート『アセンブリ 新たな民主主義の編成』水嶋一憲、佐藤嘉幸、箱田徹訳、岩波書店、2022年、Kindle Edition, p.121